

## ISEGB 2018 派遣学生 体験記

日本遺伝学会では台湾・日本間の学生の相互交流の一環として、2014年度から Taiwan Society of Evolution and Computational Biology が毎年開催する International Symposium on Evolutionary Genomics and Bioinformatics (ISEGB) に学生2名を選考し、派遣して参りました。これまで、派遣された学生から日本遺伝学会に報告書を提出していただいておりますが、今年度より GSJ コミュニケーションズに派遣体験記として掲載することにいたしました。台湾でのシンポジウムの様子や研究室訪問での経験など報告いただきました。2019年度も派遣学生を公募する予定ですので、皆さん、この体験記を参考にふるって応募ください。

企画集会幹事 中別府雄作

## ISEGB 2018 派遣学生 活動報告書

総合研究大学院大学生命科学研究科  
遺伝学専攻博士課程前期2年  
山下 永香

日本遺伝学会からの派遣学生として、2018年10月20日と21日に開催された ISEGB2018 に参加した。ISEGB は「International Symposium on Evolutionary Genomics and Bioinformatics」の略で、進化や分子生物学、バイオインフォマティクスに関わる研究発表を行う台湾の国際会議だ。私は6日間台湾に滞在し、前半は ISEGB2018 に参加及びポスター発表、後半は国立台湾大学の Dr. Chau-Ti Ting と Dr. Cheng-Ruei Lee の両氏の研究室を訪問した。学会の全体の参加者数はおそらく200人程度の比較的小規模な会議であり全ての発表は英語で行われた。発表内容は進化理論から生物多様性、分子生物学に関する研究まで多岐にわたっており、充実した内容だった。特に Dr. Chung-I Wu と Dr. Wen-Hsiung Li が会場の前の方の席から厳しい質問をしていたのが印象的だった。

私がまず感じたのは、様々な研究分野に興味を持つことの重要性だ。Dr. Chau-Ti Ting の研究室に訪問した時には修士課程の授業の一環であるセミナーにも参加した。そのセミナーのはショウジョウバエのシナプスの発達と成熟に関する発表で、正直言って全く馴染みのない分野だった。しかし、私と同じように馴染みのないはずの同世代の学生が次々と英語で質問しているのを見て、異分野の発表もコミュニケーションを諦めてはいけないと学んだ。実際、Dr. Chau-Ti Ting はそれを意図してこのセミナーを授業の中に組み込んでいる。Dr. Chau-Ti Ting とお話しする中で、研究発表は話者の一方的な情報伝達ではないのだから相互的なコミュニケーションが最も重要で、それは専門分野ではない場合にも言えることなのだ、と学んだ。

台湾での博士課程修了後の就職状況についても伺った。台湾では IT 産業が急速に発展している代わりに農業の割合が年々減少している。そのため、政府が生物・農業分野に割く研究費が削減されていてアカデミアに残る博士学生は少なく、大手企業の研究職に就くあるいは全く関わりのない分野に職を持つケースが多いらしい。台湾の大学で学位を取った学生が研究者として生き残れるほどの就職先がないことが現状の問題なのだそうだ。

ただ、台湾の教育・研究基盤を強固にして大学教育を発展させようという意欲が、少なくとも進化生物学分野ではとても高いらしい。国立台湾大学の教授陣はアメリカの大学で博士号を取った人が多く、アメリカでの研究経験を台湾で共有するために、近い分野内の研究室間での研究交流の機会を多く設けたりしているそう。実際、ISEGB もその流れの中で始まった学会の一つなのだろう。分野がひとまとまりとなって教育・研究体制を築くことは、今後の大学教育の発展に大きく貢献するだろうと考えた。

そのような大学の研究方針を反映するかのよう、交流した学生らがそれぞれに研究について熱心でとても楽しそうに紹介してくれたのが印象的だった。今回私が訪問したと両研究室では、Dr. Chau-Ti Ting はショウ



国立台湾大学の Dr. Cheng-Ruei Lee の研究室からの景色

ジョウバエの耐毒性の分子メカニズムを解明する研究を、Dr. Cheng-Ruei Lee はシロイヌナズナの起源を解析的アプローチから探る研究を行なっている。それぞれの研究室の学生に研究内容を聞くと、その現象自体がなぜどのように面白いのか、学生がその研究のどこまで貢献したいかという具体的な計画までわかりやすく説明してくれた。学生の研究に対する意欲に直面して刺激的だった。

数日間の訪問を通して、最新の研究内容、台湾での研究現場、また台湾の文化にも触れられて、とてもいい滞在だった。特に同世代の学生との交流で感じた刺激を忘れないように、これからの私の研究に生かしていきたい。

## ISEGB 2018 派遣学生 活動報告書

広島大学大学院理学研究科生物科学専攻  
博士課程前期2年（2018年度現在）

檜垣 友哉

私は2018年10月19日～24日までの6日間、ISEGB 2018 への参加、並びに現地の研究室見学のため、台湾を訪問しました。以下に、その体験について報告します。

### ISEGB 2018

私は現在、ニホンアマガエルの地域分化に関する研究を行っています。ミトコンドリア DNA や核 DNA のデータを用いた分子系統学的・集団遺伝学的解析などによって、本種における遺伝的な地域分化のメカニズムの解明が目的です。今回の ISEGB 2018 では、本成果の発表を行いました。英語での発表はほとんど経験がなかったのですが、自分の研究の面白さを伝えようと、楽しみながら発表できたように思います。実際、既定の発表時間の終了に気づかず、「もう昼休憩だよ」と言われた時は、時間を忘れるほど活発な議論ができたのだなと感じました。

### 研究室訪問

私が最も興味のある爬虫両生類学に携わる2人の先生を訪問できることになりました。訪問1日目、国立臺灣師範大学の林思民先生の研究室では、トカゲの体色や魅力度と免疫力の関係、カジガガエルやトカゲの分類、カメの学習能力等の研究や、外来種や飼育放棄されたペットの保護・飼育などが行われていました。夜は研究助手や学生らと共に、翡翠水庫近辺へ野外観察に行き、台湾固有の4種を含む7種の両生類を見ることができました。訪問2日目、中國文化大学の巫奇勳先生の研究室では、リュウキュウカジガガエル幼生の温度走性、ヌマガエルの塩耐性の研究や、轢死個体の保管等が行われていました。夜は再び学生らと共に、天母水管路古道近辺へ野外観察に行き、昨日見られなかった両生類4種に加え、爬虫類4種を観察することができました。両日とも、大変興味をかきたてられる、充実した時間となりました。このような夜の生物の観察という貴重な体験ができたのは、日本からの学生の対応をしてくれていた研究助手の方のおかげでした。台湾で何がしたいかを聞かれた際、「野外で両生類や爬虫類を探したい」と話すと、すぐに訪問先の先生や知り合いの学生に連絡してくれました。その結果、こうして多くの方々にサポートされ、私が台湾で希望したことを最大限に実現することができました。

### 全体として

一人で海外へ行くのは今回が初めてでした。最初は不安もありましたが、現地の先生や学生の懇切丁寧な対

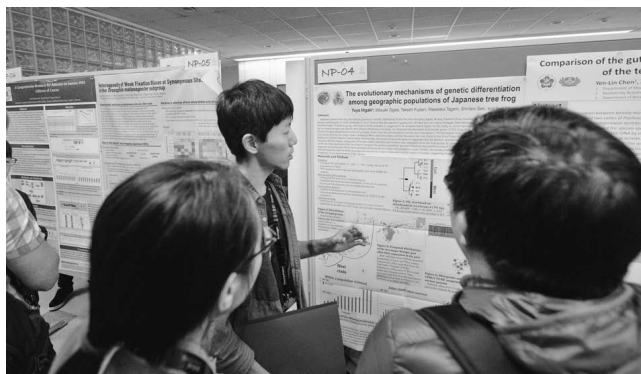


写真1：ポスターセッションにて発表を行う筆者



写真2：台湾アオハブを撮影する筆者

応のおかげで、特に困難も無く、旅を楽しむことができました。国際シンポジウムでの発表という大きな経験ができたこと、爬虫両生類学に携わる台湾の研究者や学生と交流できたこと、実際に台湾の野生生物を観察できたことなど、振り返ると今回の滞在は非常に有意義だったと改めて感じています。短期間でしたが、今回の体験を通じて自身の英会話能力の程度が実感できたほか、様々な知見に触れることで視野が広がったように思います。再び台湾へ行く機会が得られれば、次は今回見ることでできなかった両生類・爬虫類を目指して、また彼らと共に観察に行きたいと思います。

#### 謝辞

体験記を締めくくるにあたり、今回の台湾滞在の機会を与えてくださった、日本遺伝学会に深く感謝いたします。並びに ISEGB 2018 の関係者、現地での手続き等に関して直接お世話になった国立臺灣大學・曹順成先生、研究室訪問に際してお世話になった国立臺灣師範大學・林思民先生および中國文化大學・巫奇勳先生、そして野外観察等でお世話になった研究助手並びに学生の皆様に深く感謝いたします。最後に、私の研究全般に関して直接の指導を賜るとともに、今回の学生派遣へ応募する機会を与えてくださった、広島大学両生類研究センター・三浦郁夫先生に感謝いたします。

檜垣 友哉 (ひがき ゆうや)

広島県広島市出身。広島大学大学院理学研究科生物科学専攻、博士課程前期2年(2018年度現在)。幼少の頃より日々生き物とふれあう。特に爬虫両生類が好き。